

教員養成のための事例検討システムの構築

安藤輝次

1. 問題の所在

「大学の勉強って、教師になってなーんにも役に立たない。教師は、現場で育つんだ。」

もう40年以上前、このようなことを小学校の年配教師が教員志望学生に話しているのを聞いたことがある。確かに、当時は、教科教育法の授業も講義が中心であった。机椅子も可動式ではなく、小集団学習もほとんど行われなかったように思う。

ただし、教員免許取得のためには、教育実習が義務付けられており、とりわけ1989年の教育職員免許法改正によって教育実習の「事前及び事後指導」が必修化されると、1990年代初めには、事前指導で全国の有名な実践家の授業をビデオで視聴させるような実践も行われ¹⁾、教職の理論や実習への心構えだけを説くようなことも少なくなってきた。また、この時期、教育実習に行く際に抱く不安に関する調査をして、不必要でノイズになる不安を除くための支援を行ったり、専門知識や教授技術の未熟さに起因する不安に対しては、実習前に解消できる準備をしておくべきであると指摘されていた²⁾。

さらに、1997年7月の教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、教職課程に関わる「各大学・教員は、より具体的・実践的で理解しやすく、教員を志願する者の興味を喚起する授業方法を工夫する必要がある」と述べ、卒業後に教員として「職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」を養わなければならないと力説した³⁾。

とは言え、2007年においても、小学校教諭一種免許状の認定課程を有する全国46の四年制大学・学部の質問紙調査によれば、学生は「教員養成カリキュラムに対して、圧倒的な『実践性』を求めて」おり、「現場に出た時に、役立つ内容」を「一方的に知識や技術の伝達を行うような授業形式（主として講義形式）を忌避し、学生が主体的・能動的に参画できるような授業形式や工夫（ディスカッション、実践体験、ロールプレイングなど）や実践経験のある大学教員による熱心かつ支援的な授業を求めている」と言う⁴⁾。要するに、大学の教職課程では、教育実習前にストレスマネジメントの講座を複数回履修させるような実践⁵⁾や教科教育法などの科目で模擬授業等をさせる実践は行われているものの、教職の意義や教育の基礎理論などの科目において、学生自身が主体的に自らの学びを展開できるような授業が今なお充分なされてきていると言いはない難いのである。

本研究は、このような問題意識に立って、教育実習の事前・事後指導や教科教育法以外の授業において、ケースメソッドの手法を使いながら、より実践的な要素を組み込むための実践を紹介し、その有効性と課題を明らかにしようとするものである。

ケースメソッドは、岡田加奈子氏たちによって養護教員養成の学部2年生に適用して、実験群と統制群に分けてその効果を確かめた手堅い研究がある⁶⁾。その実験群は、ケース（以下において「事例」に同義）を個人で読み込み、小集団で互いに深め合い、最後に一斉討論で集約するという伝統的な方法を採用していた⁷⁾。しかし、全米理科ケースメソッドセンター（National Center for Case Study Teaching in Science : NCCSTS）を主宰するヘライド（Herreid, C. F.）によれば、学部の教育方法としてのケースメソッドは、このようなロースクールやビジネススクールで踏襲されてきた方法に拘るのではなく、時には教師が直接介入したり、ディベートやロールプレイングを用いたり、個別プロジェクトにしたり、もっと自由で多様に展開されてよいと言う⁸⁾。

確かに、ケースメソッドは、問題を発見し、多様な解決策を見出し、最後に理に叶った意思決定をするという目標は現職教員研修には有効であり、その

ために前述の伝統的な方法は有効であろうが、学部教育に対する私自身の経験を振り返ってみても、また、ヘライドが学生に知識や見方考え方を直接教える場面も必要であると言っているように⁹⁾、もっと多様なアプローチ使うほうが教育効果も高まるのではないかと思う。

私は、2011年度後期に当時勤務していた奈良教育大学の授業「指導と評価」において教育実習終了直後の学部3年生5名を対象にGoogleサイトを活用した教職の理論と実践の融合を目指した授業を行なった。そこでは、受講生である学生は、管理者である私の招待・認証を経てグループ専用Wikiページにアクセスし、授業前日までに、ホームページに掲載してある教育実習生の典型的な失敗事例や自分自身が困ったことを読み取り、争点と解決策を考えて、その結果をWikiページに投稿した後、実際の授業では、投稿内容を手がかりに皆で話し合い、時には私から関係資料等も配布した結果、学生から「面白い」「4年次の副免実習に役立つ」という声が多く寄せられたが、同時に、「教育実習前にこのような授業があったほうがよいのではないか」という指摘も受けた。

このような“小さな成功”に勇気づけられ、また学生からの問題指摘にも学んで、2012年度春学期に本学文学部の「初等教育学専修ゼミ3」を受講した教育実習着手前の3年次生25名を対象に、ケースの活用法の多様化を図った実践を行なった。この科目は、小学校教員養成を目的とする初等教育学専修の必修科目であり、4学年の卒業論文に繋がる専修固有科目であるが、教育職員免許法の「教職に関する科目」に該当するものではない。とは言え、本専修の性格上、実質的には教職科目の色彩が色濃く反映されており、教職における理論と実践の関連付けの方策を探るひとつの試みと位置づけることができよう。

2. 教育実習生と新任教員と若手教員の失敗事例の特徴

教育実習に臨むにあたって、学生たちは、(a) 授業実践力、(b) 児童・生徒関係、(c) 体調、(d) 身だしなみ、の4つに不安があり、特に(a)と(b)には高い正の相関関係がある¹⁰⁾と言われている。(c) 体調や(d) 身だしなみについては、事前指導で注意を喚起し、実習のHow toについては、最近多数

のマニュアル本¹¹⁾が出版されているので、それを推薦しておけばよいだろう。

しかし、学部の教育実習は、授業実習が中心であり、学習指導案を綿密に立てても、(a)と(b)が相関しているように、子どもとの人間関係などの生徒指導が不十分ならば、うまくいかない。教育実践は、総合的かつ複合的で、必ずしもAをやればBになるというわけではない。そこに失敗事例を学ぶ意義がある。

教育実習生の典型的な失敗事例については、①1997年に教員養成学部で3年次に実施された小学校の主免実習において困った事例や失敗した110の事例¹²⁾を冊子化し、②2011年度に奈良教育大学で教育実習を終了した学部3回生4名と教職大学院1回生4名¹³⁾に小学校の事例を読んでもらって①と②に共通するものを典型的な事例とみなした。その結果、大学における教員養成段階で教育実習に行って困ったり、失敗したことのワースト5は、次のようになった。

教育実習生の典型的な失敗

- (1) 発問
- (2) 教材研究の不足
- (3) 子どもとの遊び、約束、関わり方
- (4) 子どもの叱り方
- (5) 授業の時間配分

また、2010年度に、③教職1年目から1年半までの新任教員と④それ以後教職5年目までの若手教員にも①を読んでもらい¹⁴⁾、③新任教員と④若手教員それぞれの失敗事例の特徴を抽出したところ、次のようになった。

新任教員の典型的な失敗

- (a) 発問
- (b) 子どもの叱り方・けんか処理
- (c) 教材研究の不足や時間的余裕のなさ
- (d) 子どもとの関わり方
- (e) 授業への集中のさせ方

若手教員の典型的な失敗

- (A) 発問
- (B) 子どもの叱り方・けんか処理
- (C) 子どもへの言葉使い・関わり方
- (D) 教材研究の時間不足
- (E) 授業後の後始末

一人前の教員になるには、個人差はあるものの、一般には、3～5年の教職経験を要すると言われる。その点を考慮してこのような3つの段階における特徴付けを行なったが、いずれの段階においても「発問」がトップに挙げられており、「子どもの叱り方」は、新任教員や若手教員が二番目で、授業実習を主とする教育実習生でも上位にランキングされている点に注目したい。

なお、①の事例は、執筆者が無記名で提出しており、彼らへの口頭説明において著作権放棄をお願いし、同意してもらっているが、①を基にした②以降の調査に使った事例については、私自身の責任において、固有名詞をなくし、状況説明に関しても多少の修正加筆をした内容に変更している。

3. Google グループ専用 Wiki ページの構成

Google には、Gmail のアカウントを取得すれば、特定のテーマによって結集したグループのメンバーが管理者の作成したフォーマットの枠内で自由に書き込んだり、返信したり、文書や画像ファイルを交換し合ったりするホームページのサービスがある。しかも、Wiki ページは、管理者がブラウザ上において一定の制約の範囲内でフォーマットを修正することができ、また、特定のメンバーにのみアクセスを許可することもできる。しかも、パソコンだけでなくスマートフォンからアクセスすることもできる。

Wiki ページについては、2010年度にB小学校の若手教員研修で試みたことがあるが、当時、電子掲示板に当たるディスカッション機能への書き込みにファイルの添付機能がなく、書き込んだメッセージへの返信も Gmail にメール配信されるだけであったために、使いづらかった¹⁵⁾。ところが、Google によ

って2011年度に Wiki ページがバージョンアップされるとともに、これらの問題点が解消され、前述のように学部の教職科目「指導と評価」で実験的試行が可能となった。

さて、今回の3回生対象の前期必修科目「初等教育学専修ゼミ3」は、「先輩教育実習生の典型的な失敗事例を検討し、『初等教育学専修ゼミ3』の受講生が実習によりスムーズに着手でき、また自らの実習の失敗の対処法を学ぶこと」を目的として授業計画を立てた。

まず、授業者であり、管理者でもある私が4月10日の第1回目の授業（以下では「4/10」のように記す）では、受講生25名に対して、4月に“ケースメソッド”の必要性と理論的な説明を行い、5月から Wiki のホームページを活用した授業をシラバスの全体計画にそって行うが、各自で争点や解決策やコメントなどに計3回は最低限投稿することを成績評価の前提条件にすると説明した後、それぞれが Gmail を取得し、そのアカウントを報告するように指示した。

第2回目の授業（4/17）では、NHK 教育テレビ番組「知るを楽しむ」で放映された六本木ヒルズの回転ドアのはさまり事故について、失敗学の提唱者として有名な畑村洋太郎氏がその原因と改善策を見出そうとするビデオ¹⁶⁾を見せて、受講生にとって半年後に迫っている教育実習でも同様で、誰でも失敗はするが、それをどう認識し、対処するのかということが重要であると指摘し、ケースメソッドとの関連付けを図った。

第3回目（4/24）の授業では、指導要録改訂に伴って、教師の指導だけでなく学び手が学習したことをモニタリングしながら、その評価情報を授業にフィードバックさせる時代になっていることを力説した後、9月の教育実習を控えて、過去の実習生の学びの歩みを記した論文¹⁷⁾を読み込ませて、失敗事例を通した学びの必要性を訴えた。

そして、ゴールデンウィークの狭間の第4回目（5/1）の授業では、受講生一人ひとりの学びを踏まえて、全体的な学びに結びつけていくケースメソッドの理論について、資料¹⁸⁾に基づいた説明を行った。

以上のように、この授業科目の導入を4回にわたって行い、その間に、私は、

表1のようなWiki ページを立ち上げた。

まず、この授業の受講生は、Google サイトをクリックすると、「2012年度初等教育学専修ゼミ3」に飛び、それをクリックすると「教育実習生の典型的な失敗事例」という表紙の頁が現れる。ここに示した頁は、7月の最後の授業後に更新したものであって、5月の連休明けに立ち上げた構成と変わっていないのは、左欄を目次機能、中欄を授業ごとの連絡、右欄をこのシステムの使用方法とした点である。

しかし、その後に修正加筆したのは、第1に、①図1の左欄に示すように、「基礎授業力を高めるためのポイント」として基礎的な授業スキル¹⁹⁾ やロールプレイングの技法を紹介し、また受講生25名のうち22名がスクールサポート活動に携わっており、その際に軽度発達障害やグレーゾーンの子どもに対応に困ったというケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み

図1 Googleグループ専用Wikiページの表紙

<p>実習生の典型的な失敗:あひたらどうする?</p> <p>8月30日のサンプル 基礎授業力の高めるためのポイント 実習生向けロールプレイング 7月10日 加奈の算数力アップの秘訣は? 19)加藤正樹編『L2とL3と算数の 14)22名がスクールサポート 13)加藤正樹編『L2とL3と算数の 12)加藤正樹編『L2とL3と算数の 11)加藤正樹編『L2とL3と算数の 10)加藤正樹編『L2とL3と算数の 9)加藤正樹編『L2とL3と算数の 8)加藤正樹編『L2とL3と算数の 7)加藤正樹編『L2とL3と算数の 6)加藤正樹編『L2とL3と算数の 5)加藤正樹編『L2とL3と算数の 4)加藤正樹編『L2とL3と算数の 3)加藤正樹編『L2とL3と算数の 2)加藤正樹編『L2とL3と算数の 1)加藤正樹編『L2とL3と算数の</p>	<p>教育実習生の典型的な失敗事例</p> <p>お知らせ 皆さんがスクールのサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p> <p>7/20(日)授業は、(C)の解決策を提案員とした。これまでの学びを振り返り、これからの学びの方向性(学びの意図等)のレポートを提出してください。その報告に(赤)がついているのは、皆さんが授業で取り上げられなかった事例です。</p> <p>7/17(木)、皆さんがスクールサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p> <p>7/16(水)、皆さんがスクールサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p> <p>7/15(火)、皆さんがスクールサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p> <p>7/14(月)、皆さんがスクールサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p> <p>7/13(日)、皆さんがスクールサポートで困った事例を7月20日の時点で取り上げます。あひたらどうする?というケースが多数寄せられたので、その対応教材として、「加奈の算数力アップの秘訣は?」と(A)の「空気が読めない翔ちゃん」を教師の投げ込み</p>	<p>【教育実習生の失敗の特徴】</p> <p>教育実習生(12名)の典型的な失敗事例</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 8月1日(金) 21:52:58 50:65:78 計22名 2) 教科研究の不足(21:58:56 計16名) 3) 子どものやり方、約束、関わり方(21:58:56 計14名) 4) 子どものやり方(18:20 計11名) 5) 授業の時間配分(18:20 計10名) <p>【初等教育学専修ゼミ3自主学習の要領】</p> <p><まず、コメントに書いてみよう></p> <p>【自主学習のサンプル】の下にあるコメント欄のように、事例を読んで、あなたの思いや考えを匿名氏名で記入してください。1件につき原則1点差し上げます。</p> <p><次に、ポイントや解決策を提案する></p> <p>(1) 授業の前週水曜日に、次の事例をこのページの管理で発表するので、該当の事例をクリックして、事例を読む。</p> <p>(2) 頁上の授業のポイントを合わせたページを閲覧という文字が現れるので、それをクリックし、閲覧モードにして、[事点]と[解決策]を記入した後、月日(OA)と氏名も記入。最後に保存をクリックすると対応されます。</p> <p><出戻したポイントや解決策に対するコメントをする場合></p> <p>記されているコメントや解決策について訂正または追加しているのであれば、(3)-(6)にそれぞれ修正のコメントを追加する。</p> <p>(3) 自分も名前による追加がある場合「同じような思いをしました」場合には、下のコメント欄に同じように感じましたを書いて、その掲載を促す。</p> <p>(4) これはどうなるの?という疑問や質問があれば、下のコメント欄に疑問又は質問は書いて、記してください。</p> <p>記入したコメントは、自動的に日時が記されます。以前のコメントとは意見が違わったというところもあって、勝手に以前のコメント消去しないでください。でないと、あなたの考えが分かりません。</p>
--	--	---

教材²⁰⁾として追加した。なお、表の左欄の算用数字は、教科指導や生徒・生活指導、A以外のアルファベットは、受講生がスクールサポートとしてのこれまでの活動で困ったり、戸惑ったりした事柄を5月以降に報告したケースである。

当初の構成とのもうひとつの違いは、中欄に次回の授業で取り上げる左欄のケースを示して授業準備を促し、教育実習生・新任教員・若手教員の失敗事例の簡単な説明をするだけでなく、受講生の学びを促すための具体的な指示や助言を詳述するようになったことである。

さらにもうひとつの違いとして、当初は、右欄を「自主学習のサンプル」を通したこのシステムの使い方の説明のみに費やしていたが、その後、受講者による投稿の回数や質、根拠資料の有無なども平常点の成績評価に加えることを明示するようになったことである。なお、教育実習生の失敗の特徴に示す番号のうち、下線を付したものは、困ったり失敗した事例を調査した結果、その頻度が多いために、このホームページで取り上げているケースであり、そのうちフォントを落とした斜体の番号のケースは、時間の関係で、取り上げることができなかったものである。

4. 教師主導から学習者主導へ

4月の「初等教育学専修ゼミ3」のオリエンテーションの時点では、受講生25人のうち数人しかGmailを取得していなかった。また、インターネットで互いに書き込みながらホームページを協働で作成するような経験したり、学習者による問題解決を促すケースメソッドを受けた者は誰もいなかった。したがって、第1段階では、ケースをゆっくり検討し、教師側から適宜説明を加えたり、資料を提示するような教師主導の展開とし、第2段階以降で徐々に学習者主導に向かわせるようにした。

そのことは、受講者のWikiページへの投稿状況からも窺い知ることができる。表1の右端に記した計の欄に示すように、授業ごとの投稿数は、第1段階は、16回以下に留まっているが、第2段階以降は、22回から36回に上昇した。

教員養成のための事例検討システムの構築（安藤）

表 1 ケースに関する Wiki ページの活用状況（授業者のコメントは括弧内に記す）

授業日	取り上げたケース	争点	解決策	コメント	計
【第1段階：教科指導】					
5回目 5/8	(40)発問を用意し、じっくりと深める	2	6	6(3)	14(3)
6回目 5/15	有田和正「バスの運転手さん」のビデオ視聴と関係資料	(該当しない)			
7回目 5/22	(52)考えやすい、答えやすい発問を	4	8	4(2)	16(2)
	[授業中に(41)発問が易しすぎる、に言及]	(該当しない)			
8回目 5/29	(31)教材研究の不足の結果	3	5	3(2)	11(2)
9回目 6/12	(31)について班で作成した学習指導案の検討会	(該当しない)			
【第2段階：生徒・生活指導】					
10回目 6/19	(18)叱り方って難しい	4	5	4	31(1)
	(20)注意すべき時に注意するのが難しい	4	10	4(1)	
11回目 6/26	(1)子どもとの約束を守らなかった	4	6	2	22
	(2)遊ぼうと言われた時	2	2	1	
	(3)子どもとの関わり方が分からない	1	2	2	
【第3段階：軽度発達障害+スクールサポート活動】					
12回目 7/3	(A)空気を読めない翔ちゃん <教員研修用ケース>	設問1:7 設問2:7		36	
	(B)座ったまま動かないKちゃん	6	5		3
	[授業中に(35)時間配分にもとも気を配った、に言及]	1	1	0	
	[授業中に(83)時間配分と事前の指示を忘れた、に言及]	(該当しない)			
	[最後に(D)落ち着きのない子ども、を使ってチェック]	(該当しない)			
【第4段階：個別指導法+生徒・生活指導】					
13回目 7/10	加奈の算数力アップの秘訣は? <教員研修用ケース> [最後に(C)キモイと言われる子どもの指導は、を使ってチェック]	設問1:7 設問2:6 設問3:7 設問4:6 設問5:2	コメント:3(1)	31(1)	
14回目 7/17	(E)喧嘩をどう仲裁すればよいか	1	2	0	34(2)
	(F)××先生が嫌いだ	3	3	1(1)	
	(G)授業に集中しない子ども	3	4	0	
	(H)昨年度とまったく授業態度が違う	3	3	3(1)	
	(I)「漢字を教えて」と言われた時	1	5	2	
【第5段階：全体のまとめと評価】					
15回目 7/24	試験(C)キモイと言われる子どもの指導は 質問紙調査、期末レポート「私の学びの目当て」要領の発表	(該当しない)			

授業者である私のコメントも、スクールサポート活動のケースで多少多くなっているが、それ以外は段階ごとに少なくなっている。

また、表2のWikiページへの受講者（名簿順ではなくランダムに配置）の投稿回数から分かるように、成績評価の前提として、3回の投稿を最低限度としたが、全員がこれをクリアしており、17回も投稿している者もいた。一人当たりWikiページへの平均投稿回数は、7.2回である。なお、学期中に5週間の教育実習や兵庫県自然学校（4泊5日）に出席しなければならなかった者が

各2名の計4名いた。

表2からもう一つ分かることは、第1段階は、投稿者は少なかったものの、第2段階から第3段階へと、徐々に投稿回数が増えていることである。第4段階は、受講生自身がどうしてよいか分からないスクールサポート活動についてのWikiページであり、しかも、7/17の授業は、5つのケースを一度取り上げたために、投稿数がやや減少したように思われる。

表2 Wiki ページへの受講者の投稿回数

受講生	第1段階 ①(5回分)	第2段階 ②(2回分)	第3段階 ③(1回分)	第4段階 ④(2回分)	全段階 (10回分)	備考
A	2	0	4	3	9	自然学校で②を欠席
B	0	1	0	4	5	
C	2	2	2	3	9	
D	1	3	1	4	9	
E	1	1	1	0	3	
F	0	1	4	0	5	
G	1	1	1	2	5	
H	0	2	5	2	9	
I	1	3	0	5	9	
K	3	3	2	9	17	
L	2	0	1	3	6	
M	1	2	0	5	8	
N	0	4	4	3	11	
O	0	4	0	4	8	教育実習で①を欠席
P	2	2	2	2	8	
Q	2	2	1	6	11	
R	2	1	0	0	3	
S	1	2	0	1	4	
T	0	0	3	0	3	自然学校で②を欠席
U	0	4	0	0	4	教育実習で①を欠席
V	1	3	1	3	8	
X	2	3	3	0	8	
Y	4	4	0	0	8	
Z	0	3	0	0	3	
a	1	2	1	2	6	
計	29	53	36	61	179	
1回当り	4.8	26.5	36.0	30.5	7.2@人	

さて、教師主導が色濃く残されている第1段階から徐々に学習者主導に移行していく第3段階までの授業展開について要約しておこう。

第1段階として位置づけた5/8の授業では、(40)の「発問で困ったケース」について、受講生が考えた争点と解決策を検討すると同時に、関連した論文を読ませたり、5/15でビデオ視聴をさせたりして、より指導的な要素を強めて展開した²¹⁾。そして、5/22の授業での(52)の「考えやすい、答え易い発問を」と題する小学6年国語のケースに繋げた。なお、5/29の授業では、小学6年社会の歴史の授業で失敗した(31)のケースを取り上げたが、争点や解決策はあまりにも抽象的すぎて、どの資料を使ってどのような発問を投げかけるのかという具体的な提案をすることができていなかった。それで、授業時間外に小集団で学習指導案を検討させて、Wikiページにアップさせ、6/12の授業でどの班のどの提案が理に叶っているのかということを検討した。

第2段階は、生徒・生活指導における困ったケースに焦点化した。6/19の授業で、まず実習生の失敗事例の頻度の高い(18)と(20)のケースを関係資料²²⁾も使って検討した後、6/26の授業では、(1)と(2)については受講生の争点・解決策の書き込みが的確であったので、これらは簡単に済ませた。そして、(3)のケースについては、次のような内容(要約)であったが、受講生に2年生と3年生と男女の実習生の役を割り振って、役割逆転や独白法も使いながら、ロールプレイングをさせた。

(3) 子どもとの関わり方が分からない 〈実習生の典型的な失敗〉

2年生の男子は、運動場でサッカーをするのが大好き。しかし、ある時、3年生が「それは俺のボールだ」と言って、ボールを無理やり取り上げた。それに対して、2年の男子はカンカン！最後には罵声も飛び交い、今にも掴みかかりそうになった時、私と同じ教育実習生のA君が止めてくれた。私は、初めて本気で言い合う男の子を見て、ただ茫然としていることしかできなかった。

ところで、5月初めにスクールサポート活動に関わっている受講生に対して、

「一番困って、今もどのように解決したらよいか分からないことを、会話も含め、また、『何が争点か』を示しながら、物語風を書いて下さい。人名や学校名、その他固有名詞は仮名で結構です。」と指示したところ、早くて1週間後、遅くとも6月末までに8人からケースの提供があった。

それらのケースを検討したところ、軽度発達障害やグレーゾーンの子どもへの対応に関する知識が不足していることが分かったので、第3段階の7/3の授業では、そのような問題を扱ったケース(A)を取り上げることとした。これは、短気で暴力的、学級でも浮いている小学5年の翔ちゃんに対する教員の対処法、学級全体への指導や家庭との連携の在り方に気づかせるために教員研修用で使ってきたケースであって、争点や解決策のように大雑把ではなく、複数の設問への回答を通して問題解決をさせるものである。それから、翔ちゃんのケースで学んだ事柄を応用するために、スクールサポート活動で困った(B)の「座ったまま動かないKちゃん」のケースを取り上げた。なお、これらのスクールサポート活動で困ったケースについては、内容の出来不出来の差が大きいのので、教師側で200字程度に要約し、無記名でWikiページに掲載した。

5. 学習者主導で教員研修レベルに挑戦

第4段階の頃になると、学期末も視野に入り、今回のWikiページによる事前学習の方法の有効性を確かめたいと思い、7/10の授業で教員研修用のケース「加奈の算数力アップの秘訣は？」を取り上げた。当日の授業については、録音しており、Wikiページに学生の意見のやり取りも残されている。その模様を報告しながら、この授業の教育的な効果を確かめたい。

「加奈の算数力アップの秘訣は？」のケースは、教員研修で使って、修正加筆を重ねており、設問に対する回答を通して、個別学習から小集団学習に展開し、最後に全体討論を行って問題解決の方途を探るものであり、ティーチング・ノートも用意している。その内容を圧縮して示すと、次のようになる。

加奈の算数力アップの秘策は？ 〈教員研修用ケース〉

小学4年3学期の加奈の通知表は、算数が1となって、両親はビックリ仰天。文章題で九九を活用できない。それで、母親は、5年の1学期から通信教材をさせることにした。しかし、優秀な姉とちがって、とっかかりが遅い。図工が好きなのだが、「あれこれ指示されるのは嫌い」と言う。

担任の高野先生によれば、誰にも優しい子どもだが、算数は苦手意識があるようだと言う。先生は、ちょうど算数のTTの授業をすることになっているので、加奈のような子どもの学びを生かせる場面を作れないかと思案している。

Wikiページには、このケースと次の5つの設問を載せ、受講生に自分の考えを書くように求めたところ、26名が投稿してきた。

設問1：加奈ちゃんの問題点を挙げなさい。

設問2：加奈ちゃんの好きなことを挙げなさい。

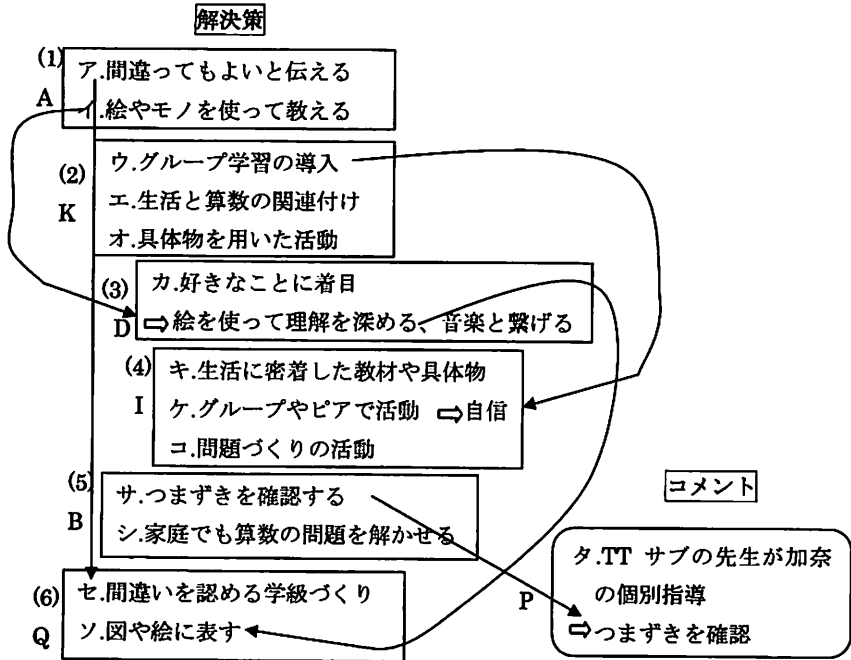
設問3：加奈ちゃんの得意なことを挙げなさい。

設問4：加奈ちゃんの算数の力を伸ばすために教師がやるべきことは何ですか。できるだけたくさんあげなさい。

設問5：加奈ちゃんの保護者とどのような連携をとっていくべきでしょうか。

このようにしてできたWikiページは、A4判7頁となり、さらにスクールサポート活動で困った事例として(C)のケースA判1頁を加えて、A3判裏表2枚のプリントを用意した。例えば、図2には、設問4の投稿内容を(1)から(6)まで時系列で掲載したが、矢印で示すように、最初に投稿した受講生A(表2を参照)の考えがDやQにも引き継がれている。特に、Dが書いた「好きなことに着目」は、前時の「空気を読めない翔ちゃん」のケースでポイントとなった“間接的指導法”と結びつけており、学習の転移が図られたと言えよう。しかし、Bのつまずきへの言及は、Pのコメントに関連付けられたが、「空気を読めない翔ちゃん」のケースの直接的指導法にまで十分に概念化できていない。

図2 設問4「教師の指導法」のWiki ページへの投稿と関連性



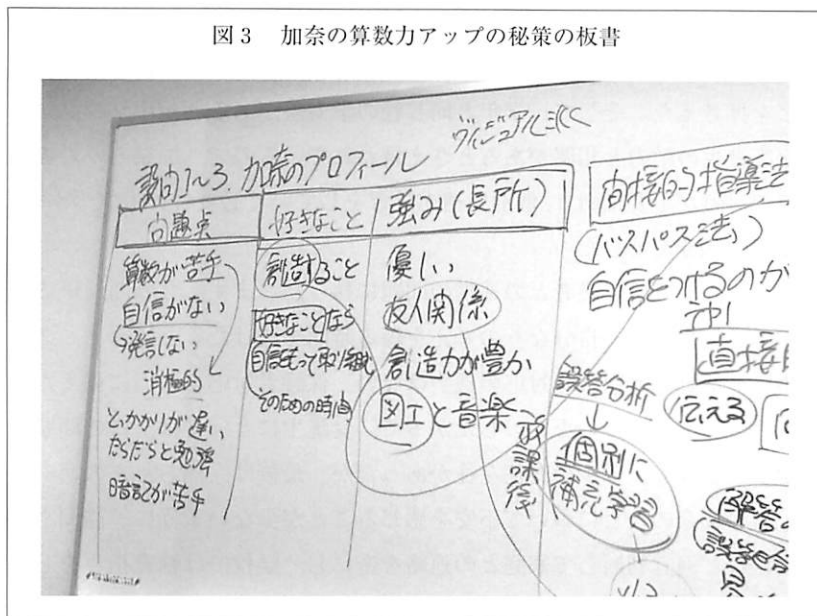
さて、授業の初めに Wiki ページのプリントを配布して、「皆さんが投稿した回答には、設問4の答えは十分ではありませんが、他の4つの設問の答えについては、現職の先生と同じようなポイントを突いています²³⁾。それを見て、皆さんの力がついたと知って、嬉しくなりました。各自でプリントの回答を読んで、“これは大切”と思う箇所に下線やマークを付けた後、班内で意見交流しなさい」と指示した。

そして、17分後、設問1から設問3までについて、班ごとに指名したところ、図3のようになった。いずれも Wiki ページに投稿した内容が反映されている。

設問4については、最初2つの班に問いかけたが、ポイントが出てこない。プリントに記した重要な回答とそうでない回答の見分けが充分できていないのである。それで、次のように述べて、挙手を促した。

「加奈ちゃんのプロフィールを見て分かるように、前回取り上げた翔ちゃん

図3 加奈の算数力アップの秘策の板書



のケースと一緒にです。加奈ちゃんは、問題行動はしませんが、小学校高学年は、高校の学力とも相関が高いとも言われており、今どう対処するのかということが問われています。

このような時、学校の先生は、直接的指導法に注目します。でも、翔ちゃんの場合と同様、もう一つの指導法がありますね。（受講生から「間接的指導法」の声有り）長所や強みや好きなことを利用して間接的指導をするということです。それは、具体的にどういうことでしょうか。さあ、分かる人は手を挙げてください。」

まずDが挙手し、「グループ学習」と答えた。「板書のどれを利用しているの？」と問い返すと、「友人関係」と言ったので、「それが間接的指導法です。加奈ちゃんは、絵や図で表すことは、板書から分かるように、得意です。これを利用することです。」と述べた。そして、直接的指導法については、「解けることができそうな問題と間違えそうな問題を用意して、後者は学級全体で考える」と

いうステップ・バイ・ステップの出題の提案があったので、間違いから学ぶ学級風土を醸成することが大切であり、その意味で息の長い学級経営が求められることを押さえた。そして、学年と同じ程の学力差があるとか小学校高学年の学力が高校生の学力と相関があるとさえ言われているので、加奈ちゃんの今の時期での対処が重要であり、個別で補充学習をしていく必要性にも気づかせた。ここまでで60分を要した。

それから設問5の保護者との連携の問題に移った。まず、2分間、班ごとにプリントを見ながら、自分なりの考えを練る時間を設けた。とは言え、スクールサポート活動でも保護者対応の機会はない。保護者対応を前面に据えた教職科目も大学で提供していない。したがって、受講生にとっては、この問題は、難しかったようで、多少の右往左往があったが、最後は、翔ちゃんのケースと同様、親が加奈のことについて不安を感じることを少ないように、訪問や電話や連絡帳など適宜判断して家庭との連絡を密にし、学校では補充指導をしており、家庭でも加奈のビジュアル的な学びの強みを認めてやり、また、KがWikiページに投稿していたように、「姉と比較しない」ということも板書に記した。

家庭との連携のような問題は、授業実習を基本とする教育実習では見過ごされやすいが、現実には、初任者や若手の小学校教員は、保護者対応に困難を感じている。したがって、このようなケースを通じて皆で考える機会を設ける意味はあるだろう。

最後に、スクールサポート活動に行った時、皆からキモイと言われ、サブ的につきっきりになったサポートに行っている自分の言うことも聞いてくれなかったが、理科の授業で星座の話だけには興味を持った子どものケース(C)について、「どうすればよいか?」と問題を投げかけた。すると、最初に出てきた答えが、特定の子どもに対してキモイと言って虐めるような学級を立て直すということである。その点は、加奈の例でも間違いを許容する学級風土を創る必要性として出てきたが、「もっと短期的な打開策はないか?」と問い返すと、Dから「星座が好きだから、そのようなビジュアルな学びを利用すればよい」

という発言があった。このような問題解決案が受講生から出ているところに、このケースメソッドを使った授業の成果が出ているように思う。

なお、この授業の翌週の7/17の授業は、すべてスクールサポート活動で困った5つのケースであって、私からの指導も多少行ったが、これまでの学習に関連付ければ、何とか解ける問題であったので、受講生主導で展開したが、文脈がわずかでも違えば、解決策も異なるということも強調して、授業を終えた。

6. 本実践の評価と考察

この授業「初等教育学専修ゼミ3」の最終回は、最初に前時で簡単に取り上げたケース（C）について、争点と解決策を書くように求めて、提出させた。その結果をまとめたのが表3である。なお、考えられる争点と解決策を箇条書きで記すように求めたので、出席者数24名（欠席1名）より、それぞれの総数が多くなっている。

表3から分かるように、多数の受講生が解決策として①④⑤の間接的指導法

表3 スクールサポート活動で困ったケース（3）に対する見方・考え方

争点	(ア)他の子からの学び合いの協力が得られない	13名
	(イ)授業に関心がない内容については集中できない	11名
	(ウ)文字を書くのが苦手	7名
	(エ)A子の得意と不得意の確認をしていない	2名
	(オ)A子の興味関心の把握ができていない	1名
	(カ)A子への理解不足	1名
	(キ)A子への指導の際に周りの進度を気にしている	1名
	解決策	① A子はビジュアルな学び方が得意なので、絵や図で学ばせる
② 学級全体でA子について詳しく知ってもらうための話し合いをする		10名
③ 学級担任からA子について情報収集をする		5名
④ A子の得意なことを認めて、それを授業で活用する		5名
⑤ A子が何に興味があるのかを確かめて、それに関連した授業をする		4名
⑥ A子の学びの進度に合わせてやらせる		4名
⑦ A子の良いところを学級全員と共有する		2名
⑧ どうして授業に集中できないのかを探る		2名

に着目したり、③や⑧のような情報収集を行い、②⑦のように、A子を学級で認めてもらうような手立てを講じる提案をしている。このような教科指導と生徒・生活指導との関連付けや問題点に着目して改善策を講じる直接的指導法だけでなく強みや好きなことを切り口に問題点にアプローチする間接的指導法を採用することは、この一連の授業のねらいであった。その意味で、授業科目の目標を達成しているように思う。

また、学期末レポートとして、「この授業で取り上げたケースを引用しながら、『私のこれからの学びの目当て』について」述べるという課題を示して、学期末に提出させたが、その結果、(18)と(20)の叱り方・注意の仕方のケースに言及した者がそれぞれ9名、(40)と(52)の発問を目当てにしたいが6名と3名、そして、(31)の学習指導案づくりを4名が選んでいた。いずれも教育実習を見据えた課題設定であろう。

そして、最後に、「失敗事例を基盤にした授業に関するアンケート調査」と題して5件法と一部は自由記述で調査を行った。その結果を集約したものが表4である。④「強くそう思う」及び③「ある程度そう思う」、①「あまりそう思わない」及び②「全くそう思わない」のそれぞれ2つを加算して全体の傾向をみると、次のようなことが言える。

第一に、今回のようなケースを軸に小集団で話し合わせる授業の進め方には、好意的意見が多数を占めたということである。質問項目17の「通常の理論的説明中心の授業と比べて、役立った」と問うた質問に対して、④と③を合わせて88%、また、22の「小集団学習」についても④と③で88%であり、圧倒的な支持を得ている。

第二に、ケースを取り上げる際に、ロールプレイングや視聴覚教材も組み合わせると、より一層効果的であるということである。3の「失敗事例のロールプレイング」のページについて役立ったかと問うと、87%が④又は③と答えている。また、20の「視聴覚教材は、事例の争点や解決策を考えるのに役立った」も92%が④又は③と答えている。ロールプレイングは6/26の(3)のケースで、視聴覚ビデオは5/15で使っただけであるが、受講生は、ケースとの組み合わせ

が有効であったとみなしている。

第三に、教育実習生の典型例の難易度は適切で、スクールサポート活動は第二次的な取り扱いがよいとみているということである。18の「教育実習生の典型例の難易度」が適切かどうかについては、79%が④又は③と答えており、18の「スクールサポートの事例を従とする」についても④と③で87%がそれよいと見ている。

第四に、実習生やスクールサポートのケースについては、5、6、11、12の質問への回答から分かるように、④③と①②の割合が拮抗しており、受講生にとっては、多少チャレンジングな授業であったのかもしれない。また、7と12の回答に示すように、コメント欄の使い勝手があまりよくなかったようである。ただし、8及び14の「何も書かない時でも、他人の争点・解決策・コメントを読んでいた」のが実習生とスクールサポートいずれのケースでも④と③を合わせて67%であった。特に投稿はしていない場合でも、関心は高かったということである。

第五に、Wiki ネットを使ったケースメソッドの授業は、好評であり、教育実習でも役立つのではないかと考えているということである。26の「このようなインターネットを活用した事例中心の授業を今後も続けて欲しい」の問いに対して、④と③で71%、24の「教育実習に行くので、このサイトに引き続きアクセスできる」ことを④と③で88%が望んでいる。

第六に、否定的な回答はほとんどなく、好意的な回答が多いのだが、1の「自主学習のサンプル」と2の「基礎授業力を高めるためのポイント」のWiki ページは、より一層充実する必要があるように思われる。それぞれの質問に対して、賛意を示す④と③はいずれも63%であるが、②の「分からない」も25%と38%であった。28の改善案を問う自由記述に2名が「もう少し見やすい頁」を求めているが、Google のグループ専用 Wiki ページは、残念ながらフォーマットの制約のためにこれ以上の変更ができない。したがって、この問題を解消するために、異なる HP ソフトを使って、パスワードと ID で認証することによって、アクセスできるようなシステムを構築できるようにする予定である。

表4 失敗事例を基盤にした授業に関するアンケート調査(2012.7.24)の結果

④の「強く思う」、③の「ある程度思う」、②の「わからない」、①の「あまりそう思わない」、①の「全く思わない」のうちから該当する番号一つ選んで○をつけなさい。(数字は、百分率で示す。)

④ ○ ③ ○ ② ○ ① ○ ① ○

授業前のインターネット利用 【活用法等の説明について】

- | | | | | | |
|--|---|----|----|---|---|
| 1. 「自主学習のサンプル」のページは役立った。 | 8 | 58 | 25 | 8 | 0 |
| 2. 「基礎授業力を高めるためのポイント」のページは役立った。 | 0 | 63 | 38 | 0 | 0 |
| 3. 「失敗事例のロールプレイング」のページは役立った。 | 8 | 79 | 8 | 0 | 0 |
| 4. 活用法に関する説明について、「こんなページが欲しい」ということがあれば、下に書いてください。
(1:もっと具体的な表紙法を) | | | | | |

授業前のインターネット利用 【教育実習生の失敗事例について】

- | | | | | | |
|---------------------------------------|----|----|----|----|----|
| 5. 争点を書くのは難しい。 | 4 | 46 | 4 | 42 | 4 |
| 6. 解決策を書くのは難しい。 | 13 | 33 | 8 | 38 | 8 |
| 7. コメントを書くのは難しい。 | 8 | 21 | 13 | 46 | 13 |
| 8. 自分が何も書かない時でも、他人の争点・解決策・コメントを読んでいた。 | 25 | 42 | 4 | 25 | 4 |
| 9. 事例の難易度は適切である。 | 4 | 75 | 8 | 13 | 0 |

授業前のインターネット利用 【スクールサポート活動の事例について】

- | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|
| 10. 「このような実習生の失敗事例が欲しい」ということがあれば、下に書いてください
(1:先生や管理職の間のトラブル) | | | | | |
| 11. 争点を書くのは難しい。 | 8 | 38 | 8 | 38 | 8 |
| 12. 解決策を書くのは難しい。 | 16 | 46 | 8 | 21 | 8 |
| 13. コメントを書くのは難しい。 | 13 | 21 | 8 | 46 | 13 |
| 14. 自分が何も書かない時でも、他人の争点・解決策・コメントを読んでいた。 | 25 | 42 | 4 | 25 | 4 |
| 15. 事例の難易度は適切である。 | 8 | 58 | 25 | 8 | 0 |

授業中 【教育実習生の失敗事例に関する授業について】

- | | | | | | |
|--|----|----|----|----|---|
| 16. 「このようなスクールサポート活動で困った事例が欲しい」ということがあれば、下に書いてください
(2:スクールサポート活動は週1回なので、問題解決は難しい 1:パターンの多さ) | | | | | |
| 17. 通常の理論的説明中心の授業と比べて、役立った。 | 46 | 42 | 8 | 4 | 0 |
| 18. 教育実習生の事例が主で、スクールサポートの事例を従とした取り扱い方でよい。 | 29 | 58 | 13 | 0 | 0 |
| 19. 18の質問について1又は0と答えた人に尋ねます。スクールサポート活動の事例について、授業でどのような形で取り上げて欲しいですか?
(1:もっと皆とシェアしたかった) | | | | | |
| 20. ロールプレイングは、事例の争点や解決策を考えるのに役立った。 | 25 | 58 | 8 | 8 | 0 |
| 21. 視聴覚教材は、事例の争点や解決策を考えるのに役立った。 | 29 | 63 | 4 | 4 | 0 |
| 22. 『授業力ハンドブック』などの資料は、事例の争点や解決策を考えるのに役立った。 | 13 | 29 | 46 | 13 | 0 |
| 23. 小集団学習は学びに役立った。 | 42 | 46 | 4 | 8 | 0 |
| 24. その他、授業の進め方について、何か感じたことがあれば、下に書いてください。
(以下1:パソコンが苦手で大変、班の人数の統一を、ディベート形式の授業も) | | | | | |

その他

- | | | | | | |
|--|----|----|----|----|---|
| 24. 教育実習に行くので、このサイトに引き続きアクセスできるようにして欲しい。 | 42 | 38 | 8 | 13 | 0 |
| 25. スクールサポート活動に行くので、このサイトにアクセスできるようにして欲しい。 | 33 | 29 | 21 | 13 | 4 |
| 26. このようなインターネットを活用した事例中心の授業を今後も続けて欲しい。 | 29 | 42 | 13 | 17 | 4 |
| 27. このような方式の授業について、授業の良い点は何ですか? | | | | | |

4:いろいろな意見が聞けた 3:他人の考えが分かる 2:実習前の心構えができた 2:自分も経験があるのでよい
以下は1:実例でわかりやすい、いつでも見れる、全員参加、身近で応用できる、思いつかない考えが出て、ためになる
班を介して考えが深まる、争点やコメントの共有化、事前に予習できる、皆で協力してページを創った

- | | | | | | |
|------------------------------------|--|--|--|--|--|
| 28. このような方式の授業について、授業の改善すべき点は何ですか? | | | | | |
|------------------------------------|--|--|--|--|--|

2:スマートフォン接続が難しい 2:もう少し見やすいページを 以下は1:最終的な考えを把握するのが難しい、書き込みが面倒、サイトの更新が必要、グループ間で連絡できる機能を

- | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|
| 29. その他、このような授業について、何か感想や意見等があれば、書いて下さい。 | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|

2:実習に役立つ、以下すべて1:集中したら、面白くてためになった、とても身近でよい、皆で考える授業である、小集団学習は楽しい、板書が見みづらい、途中から正解を考えるようになった、フェイスブックのほうがよい

7. 結びに代えて

ケースメソッドは、ロースクールやビジネススクールなど専門職大学院で使われ始め、最近では、教員養成や教師教育でも採用されるようになってきたが、いずれの分野においても、理論と実践を橋渡しするためのツールとして期待され、採用されてきた。

教員養成では、大学における座学を基本とする授業とスクールサポート活動や教育実習などの学校における実践とを結びつけるのが学校実践に根ざしたケースである。今回は、教科指導のケースや生徒・生活指導のケースを大学で別々に取り上げたが、実践紹介の中で明らかにしたように、両者は互いに関係しており、倫理や学校経営などにも関わることも珍しくない。要するに、ケースの検討を通して、学校実践は、複合的で多様であって、文脈依存的であることを理解することができるのである。

また、今回は、教員志望の学生に同年代の学生を主人公としたケースを提示したが、教育実習指導の教員にそのケースを読んでもらい、メンタリングの力を高めるために利用することもできよう。逆に、実習指導の教員を主人公にしたケースを教員志望の学生に読んでもらえば、指導教員のひとつの言動についても、より広い視野を持って、深い思慮を込めたものであることが理解できるのではないだろうか。

ケースメソッドとは、具体的な事例を通して何らかの理論を探らせたり、思慮深さや視野を広めたりするための教育方法である。それは、特定のケースを取り上げて、ある方法を適用して解決できたという事例研究ではない。問題になっているケースを調査して、問題解決に取り組むのでもない。ケースメソッドは、ケースメソッド教育（case method of instruction）又はケースメソッド授業（case method of teaching）と呼ばれており、他方、ケーススタディは、このような教育方法の意味で使うこともあれば、事例研究や調査研究のような場合にも使われており、多義的であると言う²⁹⁾。

教育方法としてのケースメソッドについて、アメリカでは、全米理科ケース

メソッドセンター（NCCSTS）のように、自然科学を日常生活や研究の過程で遭遇するケースを大学生に提示して、興味関心を惹きつけながら、背後にある理論に触れさせる試みもなされている。そして、NCCSTSは、2010年12月にホームページを一新して、ケース教材（ティーチングノートを含む）をデータベース化し、検索できるようにして大学教育に普及を図るようにしただけでなく、ケースやティーチングノートを開発するために投稿やりレビューなどの手順を組み込んだ開発システムも構築した²⁵⁾。

本研究では、まだNCCSTSのレベルには達していないが、ケースの洗練のための手立てを提案できたのではないかと思う。ケースの記述が僅かに異なれば、読み手の反応も微妙に変わってくる。例えば、「加奈の算数力アップの秘策は？」のケースの開発過程で、最初は、加奈の通知表で算数は1、体育は3として教員研修で使ったところ、加奈の算数力アップの手立てとしてビジュアルな学び方だけでなくやってみる学び方まで導入するというように議論が拡散してしまった。これでは、着目して欲しいポイントに絞り込めないで、結局、体育の成績を3から2に変更して、ビジュアル的な学びに焦点化するようにケースの記述内容を変更した。このようにケースの記述次第で話し合いの争点は変わってくるのである。

このようにケースは、一度書けば、ケースメソッドで使えるというのではない。翔ちゃんと加奈子のケース以外に本稿で取り上げたケースは、厳密に言えば、開発途上のものである。それらのケースを学生たちに読んでもらって、何にこだわり、どこでつまづくのかということを確認し、そのデータをケースの修正加筆に生かすことによってケース教材が出来上がるのである。通常、そのような手順は、3回程度は踏む必要があると言われるが、今回、Wikiページに掲載したケースに関する学生たちの投稿内容をより詳細に分析し、その結果をケースの修正や加筆に結びつけ、ティーチングノートづくりにも役立てたいと思う。それが出来た後、NCCSTSのようなネットによるケースメソッドの開発・普及のシステム化が可能になるということである。

引用文献

- 1) 船越勝「教育実習事前・事後指導における『指導』の展開—1992年度の実践を中心に—」『教育研究所紀要』奈良教育大学教育研究所，第28号，1993年。
- 2) 大野木裕明・宮沢秀次「教員養成系学生の教育実習不安と教育観に関する調査的研究」『福井大学教育学部紀要Ⅳ（教育科学）』（44），1992年，59-60頁。
- 3) 教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」1997年7月，6頁，21頁。
- 4) 岩田康之・別惣淳二・梅澤実・諏訪英広・米沢崇「小学校教員養成のカリキュラム評価に関する考察」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』Ⅱ（61），2010年，197-208頁。
- 5) 尾崎啓子「教育実習体験に関する基礎研究」『埼玉大学教育学部紀要』56（1），2007年，128頁。
- 6) 岡田加奈子・竹鼻ゆかり・三村山香里・松枝睦美「学部教育における総合的教員実践力の保証をめざすケースメソッド教育モデル教材の開発とその評価」『日本教育大学協会研究年報第29集』，2011年。
- 7) 私も岡田氏もそれぞれの編著等において，この方法を採用してきた。安藤輝次編著『学校ケースメソッドで参加・体験型の教員研修』図書文化社，2009年。岡田加奈子・竹鼻ゆかり編著『教師のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社，2011年。
- 8) Herreid, C. F. "Case Studies in Science" Herreid, C. F. (ed.) *Start With a Story— The Case Study Method of Teaching College Science—*, National Science Teacher Association Press, 2007, pp.33-38.
- 9) ヘライドは，大学の理科教育におけるケースメソッドの開発と普及に務めているが，その指導法としては，特に教師が直接介入する方法が効果的であると言う。Herreid, C. F. "Can Case Studies Be Used to Teach Critical Thinking" Herreid, C. F. et al. (ed.) *Science Stories : Using Case Studies to Teach Critical Thinking*, National Science Teacher Association Press, 2012, p.23.
- 10) 大野木裕明・宮川充司「教育実習不安の構造と変化」，『教育心理学研究』第44号，日本教育心理学会，1996年，93-94頁。
- 11) 例えば，次のような図書がある。教育技術 MOOK「小学校・中学校・高校対応 教育実習まるわかり」小学館，2007年。
- 12) 安藤輝次「教科教育法と教育実習との連携に関する基礎的研究」『福井大学教育実践研究』，福井大学教育実践研究指導センター研究紀要（21），1997年，1-17頁。
- 13) 調査対象とした教職大学院生は，全員が他大学一般学部卒で，3週間の母校実習しかしていない。したがって，奈良教育大学3回生と教師としての力量について大きな差があるわけではないと判断し，院生と学部生を合わせて，失敗事例の集計を行なった。
- 14) 調査対象とした新任教員は，奈良教育大学教職大学院修了1期生と2期生の計12名であり，若手教員は，奈良県のA小学校の12名と兵庫県の本小学校の4名の計15名である。
- 15) 安藤輝次・三木達也「若手教員における問題共有解決システムの取組」『学校教育実践

- 研究」奈良教育大学教職大学院研究紀要(3), 2011年, 78頁。
- 16) NHK 教育テレビ「知るを楽しむ 第1回目」『失敗学へようこそ』2006年8月14日放映。
 - 17) 安藤輝次「教育実習生用ポートフォリオ：その実践と今後の課題」『福井大学教育地域科学部附属総合自然教育センター年報』(4), 2001年。
 - 18) 安藤輝次「学校ケースメソッドの理論」『教育実践総合センター研究紀要』(17), 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター, 2008年, 75-84頁。
 - 19) 次の文献から目標設定, 授業を組み立てる力, 教材教具を活用する力, KR情報の授業スキルの資料を配布し, Wikiページの「基礎的授業力を高めるポイント」に解説するとともに, 資料をファイルにして添付した。奈良教育大学教職大学院100Club『逆引き「基礎授業力」ハンドブック』2012年。
 - 20) このケース教材(「加奈の算数力アップの秘策は?」「空気を読めない翔ちゃん」)は, 安藤輝次編著の前掲書(2009年)に掲載されている。
 - 21) 有田和正「社会科2年バスの運転手」(ビデオ)図書文化社, 1986年。藤川大祐「発問とその前提—発問の論理に関する考察—」『授業実践開発研究』(4), 千葉大学教育学部授業実践開発研究室, 2011年。
 - 22) 有村久春『教育の基本原理を学ぶ』金子書房, 2009年, 65-68頁。櫻村悌『新版 小学生の叱り方 うまい先生 へたな先生』学陽書房, 2006年, 167-169頁, 184-185頁。
 - 23) 本節で述べた受講生の回答は, 設問4の直接的指導法を除いて, 「加奈の算数力アップの秘策は?」のケースを教員研修で取り上げて, 現職教員から出されたポイントとなる回答とはほぼ同じである。参照 安藤輝次編著前掲書(2009年), 96-97頁。
 - 24) 高木晴夫・竹内伸一『実践! 日本型ケースメソッド教育』ダイヤモンド社, 2006年, 23頁。また, 次の文献でも, ケースメソッドとケーススタディの差異を論じている。ケースメソッド研究会『創造するマネージャー』白桃書房, 1977年, 6頁。
 - 25) See <http://sciencecases.lib.buffalo.edu/cs/collection/submit-case.asp> (2012年9月15日所在確認)

なお, 本研究は, 平成24年度文部科学省科学研究費(課題番号22530189 研究代表者: 安藤輝次)の助成を受けて行ったものである。